

A. セゴビア研究

M. Mポンセの作品出版と演奏の実態

A. セゴビア（1893－1987）がそのレパートリーを拡大するために依頼し演奏した作曲家はおおむねユダヤ系かスペイン語を母国語とする人々によっている。

その多くは演奏をより効果的、円滑にすることを目的に和音の転回、加筆や低音の移動などが多く、これは他の楽器からの編曲と同じレベルの作業が多く見受けられる。

これらの作品と比べ、M. Mポンセの作品はセゴビアの関与の仕方が大きく違っており積極的に関わっていることが2006年にショット社が出版したPonce Guitar workus GA544に見られる原典版に散見される。

以前よりポンセ作品はセゴビアとの共作だと言われている。例えばソナタ3番の第2楽章のリズム動機はセゴビア作「光なき練習曲」と非常に似通っている。

前述の原典版を見る限り、従来の版にこだわることよりセゴビアがこれらの作品をどのように仕上げたのか興味を持った人間は私だけではあるまい。

およそ10年前著作権の喪失により出版の依頼があり、原稿を仕上げたのだが結局見送りになりそのままになっていたものを公開することにした。元々出版社に渡すつもりの物なので原稿に使用したものと区別しやすいよう手書き部分はわざと荒っぽく書いてある。これは良い悪いの判断は各々にお任せするとしてセゴビアが実際の演奏で何をしてきたのか出来る限り忠実に再現しようと試みたものである。

ここにはAセゴビアの長年の演奏経験が築き上げた成果がある。

2012. 4. 30 阿部恭士